只見短歌会

六月詠草　　大塚栄一　指導

裏の家の蔓ばら明るく咲き継ぎて夫の病にやうやく慣れし　古川　英子

疲れしと思へど又も畑に出づ農婦の根性われ休ませず　馬場　八智

病む友に田苗餅を届ければしばし頬に当て温もりを言ふ　目黒　富子

災害で電車途絶えし山裾に鶯の声澄みて聞こゆる　関谷登美子

除草剤撒く日を延ばし台風の進路気にして過ぎ行くを待つ　渡部ゆき子

七本の真白き筋ぞ浅草岳に六月末の残雪光る　五十嵐夏美

雨あとの畑に出づれば丈低き野菜は草の中に埋れし　渡部ヨリ子

入院の夫は娘に三食も養はれるて食欲の増す　新国　洋子

（出　詠　順）

只見俳句会

七月例会　　目黒十一　指導

九十八歳大暑に耐ゆる自信あり　邦　夫

一泊の高野宿坊黴臭し　笑　羊

手に触れんばかりに近し夏燕　敦　子

好物のピザ焼き上がる梅雨晴間　礼

びっしょりと濡れし蛍に又の雨　康　女

てんと虫退治と云いて登校児　一　灯

迫りくる四囲の山々南吹く　邦　男

蔦茂るここも空き家となりしとは　都

自転車の母子二人の夏帽子　リウコ

蝿飛んで来るや下駄箱角よけて　吉　児

高からぬ敷居に素足とられけり　一　穂

のどけしや菓子くず奪いあう雀　恒　夫

雨休み朝寝たっぷり卵焼き　洋　子

馬鈴薯の花はマルチの畑に咲き

父母のおもかげ遠く笹ちまき

運動会放射線量異常なし

これしきと身にむちを打つ夏の風邪

地靄立つ晴るる兆や登山地図

梅雨の月形見に残る杖一つ

折り口に灰たっぷりと夏蕨

飛び跳ねて鯉の腹見す産卵期

立葵なべて夕日にかしぎおり

トマト噛む土に汚れしユニフォーム

手に触ると忘れて久し青ぶどう

でで虫や雨の行方を探さんと